

【新聞活用学習】全校研究／総合的な学習の時間

新聞に親しみながら、自分の考えを深めたり、表現をしたりしていく子ども

指定校 2 年次 上田市立丸子中央小学校 大蔵 英治／岩本 英美里

（１）本年度の NIE 活動の概要

研究指定校 1 年目は、5 学年（当時）を中心に新聞を活用した授業づくりに取り組んだ。各教科の調べ学習や社会科見学のまとめを新聞形式にしたり、朝の会の中で担任が新聞記事を紹介したりすること等を行った。

研究指定校 2 年目の最も大きな課題は、5 学年を中心に模索してきた新聞活用学習を全校へと広げていくことだった。そのために、「子どもたちがいつでも手に届く場所に新聞を置くこと」「全学級で新聞を活用できそうな学習場面を共有すること」から出発し、模索を続けながら研究を進めた。

（２）本年度の NIE 活動の取組状況（４月時点）

本校は、全校児童 429 名、17 学級（内特別支援学級 3）である。昨年度から「NIE 研究部会」を立ち上げ、5 学年（現 6 学年）を中心に新聞を活用した授業づくりに取り組んできた。新聞を購読している家庭が限られているため、担任が毎朝、その日の新聞記事から児童に興味・関心を広げていきたい記事を選んで紹介したり、定期的にテーマを決めて新聞記事スクラップに取り組んだりしてきた。

前年度の研究をさらに全校へ広げていくことができるよう、本年度は次の 6 つのことを中心に取り組んでいくことにした。

- | | |
|-------------------|------------------|
| ① 高学年における新聞閲覧台の常設 | ② 新聞活用学習年間計画の作成 |
| ③ 新聞記事のスクラップの継続 | ④ 新聞を活用した授業場面の共有 |
| ⑤ 信毎データベースの活用 | ⑥ 児童会活動における新聞作成 |

（３）NIE 活動のねらい

新聞を活用した授業づくり、場づくりを模索し、全職員で情報を共有しながら活動を展開していくことを通して、子どもたちが新聞に触れる機会を増やしたり、新聞のよさを感じたりしていくと共に、新聞記事との出会いをきっかけに「問い」や「願い」をもち、各教科・領域で目指すべき学びに迫る。

（４）全校での取り組み

① 高学年における新聞閲覧台の常設

5 年生と 6 年生の教室前廊下に新聞閲覧台を常設し、その日の信濃毎日新聞をいつでも自由に見られるようにした。そうすることで、登校後、休み時間等に子どもたちが新聞をめくり、語り合う場面が増えた。また、NIE 研究助成を活用し、一定期間のみだぐ複数の新聞記事を置くことができた。その中で、同日の新聞であっても「紙面の使い方」や「見出しの違い」等、各新聞社の工夫に触れる機会をつくることができた。

②新聞活用学習年間計画の作成

各学年1名ずつの職員が入ってNIE研究チームを作り、教科書を持ち寄って、どのような場面で新聞のよさを取り入れた授業が構想できそうかを模索した。新聞活用学習年間計画作成の際にはスプレッドシートを活用し、実際に取り組んでみる中で見えてきた活用の工夫等について随時更新していくことができるようにした。今後も継続して取り組み、実践事例を蓄積しながら、さらなる活用場を共有していきたいと考えている。

③新聞記事スクラップの継続

6学年では、昨年度までの学習を生かし、テーマを決めて定期的に新聞記事スクラップに取り組んできた。教室前廊下に掲示をし、学級の枠を越えて、互いの選んだ記事を見たり学び合ったりすることができるようにした。

また、本年度は6学年が取り組んでいる新聞記事スクラップを5学年の児童たちと担任が見に行く機会を適宜設け、上級生の学習の様子を参考にしながら、5学年でも新聞記事スクラップに取り組んだ。自分が興味のある記事を見つけたり、紹介したい記事を選んだりする際には、自然と子どもたちが集まって感じたことを伝え合う等、記事との出会いをきっかけに、互いの思いを語り合う姿が見られた。昨年度までは一つの学年を中心に取り組んでいた活動が少しずつ他学年へと広がってきている。日常的に新聞に触れる機会を生み出すことにもなり、今後、より多くの学年での取り組みへとつなげていきたいと考えている。



④新聞を活用した授業場面の共有

隔週でNIE研究部会を開き、各学年の新聞を活用した授業づくりの現状と課題を共有し、互いに知恵を出し合いながら授業づくりに取り組んだ。

前年度までに本校で取り組んでいた活動を他学年へと広げたり、NIE実践報告書に掲載されていた他校の実践を参考にしたりしながら各学年の実情に応じて授業づくりを進めた。また、公開授業前には、NIE推進協議会の方々にも研究部会に加わっていただき、授業者の願いに寄り添いながら、よりよい新聞活用の在り方についてご助言をいただいた。



⑤信毎データベースの活用

信毎データベースの活用について全職員で確認し、授業の中でいつでも活用できるようにした。公開授業の際には、研究部会の職員全員で授業学級や授業者に適した新聞記事を探す等、実際の授業づくりを通して活用の仕方を学ぶことができた。

⑥児童会における新聞作成

児童会活動の中で、運動委員会によるオリンピックやワールドカップに関する記事の特集、環境委員会による環境問題やリサイクルをテーマにした新聞づくり等、その委員会の特徴を生かした新聞作成に取り組み、校内に掲示した。子どもたちの興味をもとに、様々な視点から情報が集められた新聞ができあがった。

児童が自分の伝えたいことを発信していく際に、ねらいに応じて新聞形式にすることを選択肢の一つとして考えていくことができるようになり、さらには、それが学校文化として根付いていくとよいと感じている。



(5) 公開授業の活動内容【令和4年9月27日(水)／6学年／授業者：岩本 英美里教諭】

1. 単元名「収益金の使い道から考える わたしたちの思い描く未来～SDGs への挑戦～」

(総合的な学習の時間／全3時間中第1時)

2. 本時のねらい

自分たちが育てたトウモロコシを学区内にある直売所で販売して得られた売上金をどのようにウクライナに寄付すればよいかを考え始めた子どもたちが、ウクライナ支援に取り組む長野県内の大学や企業についての新聞記事を読み、感じたことや気づいたことを伝え合う活動を通して、自分たちがどのような方々を支援したいのかより具体的に決め出していくことの必要性に気づき、ウクライナの人々の現状や必要としている支援等を調べる学習への見通しをもつことができる。

3. 本時の位置

- ・前時…トウモロコシ栽培や販売活動を振り返り、感じたことを共有する。
- ・次時…ウクライナの人々の現状や必要としている支援を新聞記事等で詳しく調べる。

4. 指導上の留意点

県内で子どもたちと似た活動や子どもたちの参考になる活動を報道している記事を活用することで、自分たちの活動をより具体的に考えられるようにする。

5. 本時で扱う記事に寄せる教師の願い

本時は「野菜売りウクライナ支援 (令和4年9月3日信濃毎日新聞)」と「伊那の KOA が飯田市に100万円 (令和4年6月23日信濃毎日新聞)」の2つの記事を扱う。

「野菜売りウクライナ支援 (令和4年9月3日信濃毎日新聞)」は、長野大学の学生が、育てた野菜を上田市内で販売し、売上金の一部をユニセフ経由でウクライナに届けたことが書かれた記事である。長野大学の学生が行っている活動は6年2組の活動と非常によく似ている。子どもたちは、「地産地消に取り組み、その売上金を世界で困っている人のために使いたい」という願いをもって活動している人が身近にいる事実背中を押され、これまでの活動に手応えを感じると共に、自分たちの今後の活動をより前向きに考えていこう。また、「ユニセフ経由でウクライナに届ける」という文から

「支援団体を通じて寄付をする」という新たな検討材料にも触れていくことができる。

「伊那の KOA が飯田市に 100 万円（令和 4 年 6 月 2 3 日信濃毎日新聞）」は、電子部品製造会社の KOA が社内にウクライナ支援に向けた検討グループを立ち上げ、県内への避難民やウクライナへの支援を検討してきたこと、社内で 600 人を超える社員が「ウクライナリボン募金」に協力し飯田市に 100 万円を寄付したことなどが書かれている。この寄付は、UNHCR を通じてウクライナに届けられていることから、子どもたちは、ユニセフだけでなく様々な支援団体があることを知ることができる。また、ウクライナの小学生が長野県内に避難してきて、県内の小学校で学んでいる事実を全員で共有することもできる。

これらの記事に出会うことにより、子どもたちが「どんな支援団体を通じてどんな人たちに支援をしたいか」を考えるきっかけが生まれ、自分たちの願いを見つめ直しながら、その願いをかなえるための寄付の在り方をより具体的に考えていくことを願い、これらの記事を選んだ。

6. 展開

	学習活動	予想される児童の反応	指導・支援・評価	
導入	1. 販売活動の振り返りを共有する。	・「売上金の一部は世界で困っている人のために寄付します」とお客さんに伝えたいけどどんな寄付をしようか。 ・ウクライナにどうやって寄付金を送ったらいいのかな。 めあて 売上金をどうやって寄付するかを考えよう。	・前時を振り返り、本時の見通しを明らかにする。	3
展開	2. 「地球クラブ」の記事を提示し、感じたことや気づいたことを伝え合う。	・自分たちと同じように地産地消に取り組んで売上金を困っている人のために寄付している。 ・青木村の「地球クラブ」と自分たちは、無農薬で野菜を育てていることも共通していると思った。 ・最初から、売上金を何に使うか具体的に考えている。 ・もう 24 万円も寄付しているなんてすごい。 ・「ユニセフ経由でウクライナに届ける」と書いてあった。ウクライナの子どものために寄付したお金を使ってもらえるのかな。 ・「地球クラブ」が直接ウクライナにお金を寄付したわけではないことがわかった。 ・今までも東日本大震災の被災地支援などを行っていて、いまはウクライナに支援している。	・記事は子どもたちが個人で読むのではなく、教師が難しい言葉の意味を説明しながら読むことで、内容を正確に理解できるようにする。	15
展開	3. 「伊那の KOA」の記事を読み、感じたことや気づいたことを伝え合う。	・「ウクライナ支援の検討グループを社内につくった」と書いてあって、すごいと思った。 ・「県内への避難民」とあった。ウクライナから長野県内に避難しているんだな。 ・「寄付は UNHCR を通じてウクライナに届ける」と書いてある。難民のために使われるのかな。 ・「国の復興に役立ててもらおう」と書いてあるけれど、具体的にどんなことに使われているのかな。	・「地球クラブ」の記事よりも内容を理解しにくいので、企業が寄付に向けてどのようなことをしたのかを時系列に沿って説明する。	15

	4. ウクライナにはどんな立場の人がいるかを考える。	・「避難民はどのような支援を求めているのか」と質問している。避難民が一番必要としている支援をしているか知ることは大切だな。 ・ウクライナには「兵士」「戦争に巻き込まれた女性や子ども」「現地でボランティアを行っている医療スタッフ」など、いろいろな立場の人がいるな。 ・ウクライナから外国へ難民となって避難している人もいるね。 ・自分たちはどんな支援ができるんだろう。	・ウクライナの様々な立場の人を紹介するために、新聞記事の写真や見出しを活用し、その人たちの生活や困り感を想像できるようにする。	5
終末	5. 本時を振り返り、次時の見通しをもつ。	・戦争に巻き込まれて普通の生活ができていない子どもに支援したい。 ・難民となって外国で暮らしている人に寄付したい。 ・ウクライナの子どもがどんなことに困っているのかを調べたい。 ・どの立場の人でも寄付を必要としていると思うけれど、自分たちが一番支援したい人は誰かをみんなで考えたい。 ・それぞれの立場の人が何に困っているのか、どんな支援を必要としているのかを調べたい。 ・各支援団体に寄付をするとどんなことにお金を使ってもらえるのかを調べたい。	・自分の考えを書けない子どもに、どんなところに思い悩んでいるのか尋ね、明確にしたいことを一緒に考える。 評価 ウクライナの人々の現状や必要としている支援等を調べる学習への見通しをもつことができたか、学習カードへの記述からとらえる。	7

【公開授業当日の板書より】



(6) 児童・生徒の反応

「野菜売りウクライナ支援（令和4年9月3日信濃毎日新聞）」を読み、担任と一緒に記事に書かれている情報を整理していった子どもたちは、自分たちと同じように地産地消に取り組んでいる学生や企業があるという事実に出会った。「自分たちと同じ思いでやっている人がいて嬉しい」（K児）、「自分たちも寄付をしたい」（A児）等と感じたことを語り合い、これまでの活動に対する手ごたえをより確かに感じながら、収益金をウクライナへ寄付したいという思いを膨らませていった。



さらに、「伊那のKOAが飯田市に100万円（令和4年6月23日信濃毎日新聞）」を読み、『支援団体を通じて寄付をしていること』や『様々な支援団体があること』を知った子どもたちは、「いろんなところで寄付できるんだな」（B児）等、記事を通して知ったことを拠り所にして、自分たちの収益金の寄付の仕方を考えていった。



その後、M児の「本当に必要なものは、お金ではなくて、明日を生きる道具だと思う」という言葉をきっかけにして、ウクライナには様々な立場の人々

がいることを教師と一緒に確認していった子どもたちは、『いま、ウクライナの人々が本当に必要としているものは何か』『自分たちが支援をしたいのはどのような人々なのか』を問い始めていった。中には、「決められない」と頭を抱えながら悩み続ける児童の姿もあった。

これまで「ウクライナに寄付をしたい」という思いをもちながら活動に取り組んできた子どもたちが、2つの新聞記事を読んで出会った事実、また、教師が新聞から集めた様々な人々の写真（信濃毎日新聞に掲載されていたもの）を目の当たりにすることを通して、「ウクライナ」という「国名」でなく、「その国で生きる人々」をより具体的に思い描き、支援の在り方を見つめていった。

【本時を終えて／授業者の振り返り】

- ・子どもたちと同じ活動をしている記事を取りあげたことで、子どもたちに自信をもって活動を進めていってほしいと思った。しかし、企業が集めた募金額（100万円）が自分たちの寄付するお金（8000円）とかけ離れすぎていたため、子どもたちの意識は募金額の多さにむいてしまった。このことから、子どもの意識を推測しながら記事を選ぶことが重要だと思った。
- ・授業を構想するときに、いくつ記事を扱うか最後まで迷った。最終的に、本時は2つの記事を扱ったが、それにより1つの記事にかけられる時間が少なかった。もし、記事を1つにしていたら、グループで意見交換をする場面もつくれた。一方で、2つの記事を扱ったことで、考えを再構築できた子どもや、様々な支援団体があること、現地のニーズにあわせた支援をすることの大切さ（本当に必要なのはお金ではなく明日生きるための食糧ではないか）などに気づけた子もいた。記事をいくつ扱うことが適切だったかは、授業が終わったいまでも判断が難しいと感じる。

【授業研究会で話題になったこと／参観された先生方からいただいたご意見】

- ・子どもたちが得る情報量に配慮すると、1つの記事でもよかったかもしれない。ただ、地球クラブの記事と KOA の記事のどちらを選ぶかは迷う。
- ・2つの記事があったからこそ生まれた意見もあった。子どもたちの発達段階に応じて新聞記事の量を調整していくことの大切さを感じている。
- ・TV などは映像が通り過ぎていくが、新聞は何度も読み返すことができ、考えが何度も構築されていく。そんな授業だった。
- ・子どもの思いが新聞記事に近づいたり、子どもの思いが新聞記事をこえたりしていた。
- ・記事を読んだ後に、「思ったことを書こう」ではなく「自分たちの活動と共通していると思ったことや気づいたことやわけを書く」という方法を取り入れていくと、子どもたちの意識をより焦点化していくことができる。
- ・先生が記事を読んでいるのを聞きながら子どもが記事を目で追う場面で、気になったところに線を引かせてもよかったが、それをするには普段からその活動しておくことが重要である。積み重ねが大切。
- ・今回の新聞記事を使ったことで、子どもたちの「外の世界を想像する力」「社会とつながる力」が伸ばせたように感じた。
- ・記事を活用する上での教師の意図がとても明確な授業だった。丁寧な教材研究の賜物である。

(7) 成果と課題

昨年度は5学年のみだった取り組みを学校全体へと広げ、全学年で新聞の活用の可能性を模索し、実践した時間そのものが本校にとって大きな成果ではないかと感じている。

様々な活動を通して、校内で児童が新聞に触れる機会が増えてきている。特に、高学年では、テレビのニュースで見た内容について、閲覧台にある新聞を見ながら友と語り合う児童がこれまでよりも多く見られるようになった。また、朝の会の中で担任が新聞記事を紹介する際に、「今日は、〇〇についての記事だと思う」等、新聞にどのような記事が掲載されているのかを楽しみにする児童の姿も見られる。これらを積み重ねていくことが、子どもたちが新聞をより身近に感じたり、自分たちの生活と社会の動きが結びついていることを感じたりすることにつながっていくのではないだろうか。

一方、未習漢字や難しい言葉が出てくることで「新聞は難しい」という児童の抵抗感につながっており、これらに対する手立てを考えていく必要がある。また、学習活動の中で児童が自ら新聞を活用して調べ学習に取り組んだり、朝の会に興味のある新聞記事を紹介し合ったりする等、日常的な新聞活用へと繋げていくには、さらに時間を要し、今後も新聞の価値や魅力に児童が継続的に触れていく機会を設けていく必要がある。

2年間に渡り、新聞に親しみながら、自分の考えを深めたり、表現をしたりしていく子どもの姿を思い描き、授業づくりに取り組んできた。テーマに立ち返って考えてみた時、教師である私たちが、どれだけ新聞記事に触れ、考えを深める機会に出合っているか、また、思わず語りたくなったり児童に伝えずにはいられなくなったりするような新聞記事に出合っているかが新聞を活用した授業づくりで最も大きな要素であると感じている。まずは教師自身が新聞を手にとること。そこから次年度の歩みを進めていきたい。

